

## 《研究ノート》

## 桜井庄太郎博士の「日本児童生活史」研究

高 島 秀 樹

## 目 次

はじめに

## 1. 桜井庄太郎博士の略歴と業績

(1)略歴

(2)業績

## 2. 桜井庄太郎博士の「日本児童生活史」研究

(1)研究の動機と背景

(2)研究の目的と内容

(3)研究の基本的視点

(4)研究の方法と素材

(5)児童観と児童への期待

## 3. 桜井庄太郎博士の「日本児童生活史」研究の位置づけ

(1)研究の位置づけ

(2)今日の評価

## はじめに

本稿の目的は、日本の児童史、児童生活史研究の先駆者として、その存在は知られているものの、具体的な研究内容については十分明らかにされていない、桜井庄太郎（1900～1970）博士の日本児童史研究について、桜井博士のこの分野における主著である『日本児童生活史』（1941年、刀江書院刊、新版1948年、日光書院刊）を中心に、その研究の目的、内容、方法などを明らかにした上で、今日的視点から見た研究史上における位置づけと評価、さらにその研究から学ぶべき点を考えることにある。

桜井庄太郎博士の日本児童史研究の存在と研

究史上における意義については、研究者の間では広く認識されているところであって、一例として最近刊行された加藤理の『「ちご」と「わらは」の生活史』を見ると、その「はしがき」において「従来の子ども史研究の一端を振り返ってみると、一九四一年に桜井庄太郎によって書かれた『日本児童生活史』が、通史的に書かれた日本の児童史の先駆けである。…（桜井博士の著書からの引用）…子どもの歴史研究の初期に、このような卓見が存在し、その上に立った書物が書かれたことは、日本の子どもたちにとって幸いである。」<sup>1)</sup>と、この研究を日本の児童史研究の先駆と位置づけるとともに、高く評価している。この例にも見られるように一定の位

置づけ、評価を得ながらも、その研究の具体的内容については今日必ずしも広く示されているとはいえないのであって、その研究内容を明らかにし、それを通して第二次世界大戦以前に今日的視点から見ても十分評価しうる視点と内容を持った、このような総合的な児童生活史研究が行われていたことを示すことに、本研究の第1の意義が存在すると考える。さらに、それは同時に日本における児童とその生活の研究、特に歴史的研究の歴史の一端を明らかにするという第2の意義、現代の児童とその生活実態、社会環境などについて明らかにするには、それらのあり方を規定する歴史的要因について明らかにすることが必要であるとの認識を深めることに寄与することができるであろうという第3の意義を持つと考える。

なお、研究の対象とする桜井博士の『日本児童生活史』は当初、尾高豊作が主催する雑誌『愛児』に7回（1939〔昭和14〕年2月～8月）にわたって連載され、その後単行本として刊行された『旧版』と、第二次世界大戦後若干の改訂を加えて再刊された『新版』がある。ここでは、桜井博士の研究にいたる動機など著書の成立状況については『旧版』の「序」に直接示されているところから、これらの点については『旧版』を、一方、著書の内容そのものについては『旧版』には刊行時の時代的・社会的状況から制約があったと考えられ、『新版』において増補・改訂した点もあることから、内容的には『新版』を、やや変則的ではあるが主な素材として検討を加えていくこととしたい。なお『旧版』『新版』の構成について、比較対照することができるよう目次を注2）に示した。<sup>2)</sup>

## 1. 桜井庄太郎博士の略歴と業績

### (1)略歴

桜井庄太郎博士は1900年、東京生れ、日本大学法文学部社会学科、同大学院社会学専攻で社会学を学んだが、フランス社会学、特に研究者としてはÉmile Durkheim (1858～1917)、Marcel Mauss (1872～1950) に関心を持ち、それを自己の研究に、主として方法論を形成する上で取り入れていった。後年、日本封建社会意識の研究の中で、「恩と義理」について解明する際にM. Maussのポトラッチ概念を準用したことは、博士の独創的な着想として今日もお高く評価されている。大学院修了後、第二次世界大戦期までは、大学教員としての地位には必ずしも恵まれず、日本大学主事（図書館員）、日本大学予科講師などとして勤務するとともに、雑誌『社会学徒』の編集の任にあたりながら研究・発表を続けた。さらに『日本児童生活史』（旧版）の刊行後にあたる時期であるが、大日本青少年団に勤務（1941～1945年）し、『大日本青年団史』などの著述・編纂の仕事に従事したが、この間の全国各地にわたる調査・資料収集・研究が博士の児童史・青年史の研究に寄与したと考えられる。戦後は日本大学、中央労働学園（後年、法政大学に合併）、中央大学、奈良女子大学、日本大学、明星大学において大学教員としての経歴を重ね、研究・教育に大きな成果をあげた。1959年12月には『社会意識の研究—日本封建社会における社会関係意識を中心として』により、文学博士（日本大学）の学位を得ている。1970年（昭和45）8月24日、明星大学人文学部社会学科教授として在任のまま、満70歳で逝去された。<sup>3)</sup>

## (2)業績

桜井博士の研究業績には、きわめて多くのものがあるが、それらの中で論文・学会発表についてはここでは省略して、著書のみを注4)に記載した。<sup>4)</sup> この著書目録からも理解されるように、第1にその研究活動の初期から社会史、社会意識(史)、具体的には日本の封建社会、封建社会史、封建社会の社会意識を一貫して研究対象としており、戦前期から、今日においても高く評価されている独自の研究成果をあげてきた。<sup>5)</sup> 第2に戦後 I F E L (文部省教育指導者講習会)の教育社会学研修を受講したことを直接的な契機として、教育社会学の研究を展開してきた。この両領域の研究を基礎とし、大日本青年団に勤務したこととも関連して、第3に日本児童史・青年史研究を展開してきた。<sup>6)</sup> この内、第1、第2の研究領域とそこでの研究成果が博士の日本児童史研究と密接な関係を持ち、その基礎となっている点が、以下の検討においても注意されなければならない。

## 2. 桜井庄太郎博士の「日本児童生活史」研究

### (1)研究の動機と背景

桜井博士の児童生活史研究の直接的な契機、動機は『旧版』の「序」に「もともと児童の問題は、わたしの専門ではなかったのであるが、自分の子供が小學校に行くようになったので、その前後から、日本の児童文化の貧困を憤り慨く心持から、關心を持ちつづけるようになった。」<sup>7)</sup>とあるように、きわめて实际的、実践的なものであった。このような動機から研究が出発したことから生ずる研究関心、研究姿勢はこの著書に一貫して現われている。例をあげるならば、近代、明治以降現代にいたる児童文化について取り上げた「第六編 近世 第七節 児童文化

の諸問題」における「明治以後現代に至る間に、児童の問題はだんだんに社會の注意を集め、熱心にとりあげられ、また科學的に研究されて來た。ところが、長い間、不當に閑却され續けて來て、ようやく昭和十二、三年ごろになってから議論されはじめた問題がある。児童文化の問題がすなわちそれである。…(略)…さて、児童のための文化財として最も重要なものは、おそらく圖書、雑誌であろう。これまで児童には、はなはだしく粗惡な讀物や繪本が興えられていたにもかかわらず、その内容について反省や批判を加えようとする人はすくなかった。…(略)…歴史的カナヅカイと多すぎる漢字とは、児童文化發達の大きな障害物である…(略)…」<sup>8)</sup>という児童文化の貧困についての認識・発言には、桜井博士の研究関心、研究姿勢が直接的に反映しているととらえられる。

桜井博士の児童生活史研究はこのようなきわめて实际的、実践的な動機から始められたが、その研究水準を高め、研究内容を充実したものとすることができたのは、その背景として、桜井博士のそれまでの社会史・社会意識の研究の蓄積があったからである。具体的な内容、関連については後に検討したいと考えるが、桜井博士が「社会史」、「社会意識」についてどのように把握していたかを先に見ておくと、社会史については「私は、社会学を人間の共同生活・集團生活の理論と考え、かかる社会学の理論に立脚した歴史が社会史であると解釈する。言葉を換えていえば、社会史はとくに人間の共同生活・集團生活に視点を置いた歴史である。」<sup>9)</sup>と、社会意識については「社会意識とは、同一社会に属し、共同生活をいとなむ人々の間に見いだされる共通の意識であって、しかもそれらの人々によって意識内容の共通が意識されているものである。」<sup>10)</sup>ととらえている。さらに、社会意識を研究する際の基本的な視点については「從

來、思想史、道德史などと稱するものには、思想や道德をそれが生れた社會の基盤から切り離し、單なる個人的事實として、觀念的に論じているものが多かったが、わたしはこの書において、日本封建社會において形成された社會意識や思想、道德などを、社會的事實として、社會的關連において、特に階級的觀點から考えてみた。<sup>11)</sup>と示しているが、この視点は兒童生活史の研究にも共通し、生かされているといえる。例をあげるならば、近世、江戸時代の子どもの状況についての「第五編 近世 第五節 文學にあらわれた庶民の子」の叙述、「この時代の文學作品や劇では、子は、しばしば親の忠義のために、犠牲になったり、あるいは親と別れたりする。これを通して、この時代の子に對する一般の觀念を見ることができるが、前に述べた勘當や敵討などと同じように、そそれは、いずれも、主従の間の道德が家族の間の道德より重んぜられていたことをあらわしていると共に、この時代の家族制度の特徴を示し、子に對する親權の強大を反映しているのである。そしてこれらの作品にあらわれているものは、町人の目に映じた武士階級の親子關係や主従道德・家族道德であると共に、作者が所属する町人階級それ自身の道德觀であり、社會觀である」<sup>12)</sup>における認識は、まさにこうした視点に立つものであると理解することができる。

## (2)研究の目的と内容

桜井博士は歴史研究が多方面にわたって熱心に行われているにもかかわらず、兒童の歴史が十分に明かにされていないこと、家族史や教育史は兒童史の全部を明かにしてくれないことを指摘した上で、「…(略)…兒童の生活を全面にわたって総合的に觀察したもの…(略)…」が必要であるとして、「わたしは、兒童の生活をかように総合的に取扱った歴史を日本兒童生

活史と名づけたと思う。」<sup>13)</sup>と、兒童の生活を総合的に解明することが「兒童生活史」の目的であり、同時に兒童生活史の概念になると定義している。

また、総合的という点については、「さて兒童生活史は、兒童問題の歴史ではない。社會事業史からも材料の供給は受けるが、社會事業史の中から兒童に關することがらだけをひろい出したものが兒童生活史ではない。かような考えから、私は兒童社會史という名稱を採らなかった。／また兒童生活史は、教育その他の兒童文化現象の變遷だけを歴史的に述べるものでもない。それ故、兒童文化史の名もわたしは採らなかったのである。／兒童の社會生活、そしてその上に築かれ、その中に營まれる兒童文化の諸現象、それらを相互に關聯させながら総合的に歴史的に考察するもの——こういうものが、わたしの考える『日本兒童生活史』である。」<sup>14)</sup>「したがってそれは兒童文化史よりも、また兒童社會史よりも範圍がひろいのである。」<sup>15)</sup>と説明し、このような考え方にたって、兒童社會史、兒童文化史という考え方、名稱を採用しなかったことを明らかにしている。

兒童生活史の研究対象については、「日本の過去それぞれの時代の兒童が、どんな状態で生活して來たか、それぞれの時代のそれぞれの社會で、兒童はどのような状態におかれ、どんなふうに住したか、また親子の關係はどのようなであったか、兒童に對して親は、また一般の社會は、どんな考えをもっていたか—日本兒童生活史は、これらの問題に答えなければならないのである。」<sup>16)</sup>と示している。この説明からは、桜井博士は兒童生活史研究において明らかにされなければならない具体的な論点として、1. 兒童の生活実態(＝基本課題)、2. 兒童のおかれた社会的条件、3. 親子關係、4. 兒童觀、(2.～4.を含めて兒童を取りまく社會關係と

とらえることもできる)などを考えていたととらえられる。このように児童生活史の研究内容を理解する考え方は本書の内容にも反映されているのであって、それは注2)に示した目次からも理解することができる。

なお、研究対象である児童の範囲については、「尚、厳密に言えば、児童期という語は出生から青年期に至る直前、すなわち、男児ならば、出生から十三、四歳まで、女児ならば出生から十二、三歳までを意味し、嬰兒期、幼児期、少年少女期（學童期、狭義の児童期）の三期を包含する。」ととらえているが、実際の研究では「…（略）…成人になる前の、幼い或いは若い人々を取り扱いたいと思う。」<sup>17)</sup>と研究対象をやや広く設定している。

### (3)研究の基本的視点

実際の児童生活史の研究を進めていく基本的な視点、態度として桜井博士は「…（略）…歴史上の名高い少年だけを扱うものであってはならない。歴史が偉人や英雄だけでつくられるものではないことは言うまでもない。…（略）…日本児童生活史は、有名児童であると無名児童であるとを問わず、古代から現代に至る日本の児童のすがたを如實に示すものでありたいと思う。」「また日本児童生活史は、日本の歴史に現われた児童生活の輝かしい積極面を描いて、日本の児童の偉さとよさを充分明かにすると共に、児童をめぐる社会の暗い一面にも注意を怠らぬものでありたい。」<sup>18)</sup>などと、その考察が一面的にならず、総合的なものである必要性を説いている。このような基本的な視点は資料的に制約された中においても、できる限り階級的、地域的に偏りのない対象を取り上げようとしている点に具体的に実現されており、このような点に桜井博士の児童生活史を認識する、より広くいえば歴史認識の基本的視点を見ることがで

きる。

この研究では日本の歴史の流れを『旧版』では5段階、『新版』では6段階に区分しており<sup>19)</sup>、それを「編」とする構成となっているが、それぞれの「編」の冒頭においてその時代と社会の概況を示し、その上でその時代の児童の状況を明らかにするという構成をとっている。それではどのような点に重点をおいて時代状況・社会状況をとらえていたのか、「近代」を例として見ると

1. 近代というのは明治維新以後、現代にいたる間のことである
2. この期間において孤立・鎖国・封建日本は、わが国未曾有の大変革期であった明治維新をスタートとして、世界の一環としての近代・資本主義日本へと転換した
3. この間に新経済組織が急速な進展を遂げ、資本主義社会が現われ、帝国主義的独占資本主義の階段へ進んだ
4. 封建制度に基づく階級的差別はなくなったが、新たな階級が生じ、労働問題が発生し、労働運動も発展してきた

と示されており、その上で「明治以後の社会は、かように急速にうつり変わったので、児童生活のあらゆる面にも、かつてあらわれたことのないほど大きな、根本的な変化が起り、その問題もきわめて多く、また複雑になった。」<sup>20)</sup>と説明している。この例からも、桜井博士がどのような点に重点をおいて時代状況・社会状況をとらえようとしていたか、そして、時代状況・社会状況と児童生活との関係をどのようにとらえようとしていたかを理解することができる。

### (4)研究の方法と素材

桜井博士の児童生活史研究の方法上の特徴は、先行研究や文献のみに頼らない点にある。これは当時の歴史研究が、政治史、制度史中心であっ

て、現在のような社会史、生活史の研究が十分に行われていなかったこと、さらに児童史の研究も十分に行われていなかったことから、先行研究の成果に依存することができなかったという事情もあろうが、それ以上に多様な資料を活用することによって、児童の生活実態を資料的制約をこえて可能な限り明かにし、総合的に認識することを目指していたからであると考えられる。各時代（編）ごとに、具体的にどのような資料を用いているかを『新版』から抜き出し、網羅すると次の通りである。

第一編 原始時代…遺物（文献による）、埋葬状況・副葬品（文献による）

第二編 古代（文献は役に立たない＝考古学、人類学、社会学の研究によるか、中国側の資料にたよるほかはない）…『魏志倭人伝』、『日本書記』、聖徳太子・片岡山伝説

第三編 上代…「神楽歌・催馬楽」（童謡・民謡）、『日本霊異記』（童話的な説話）、『万葉集』（「貧窮問答歌」、子守歌、など）、『梁塵秘抄』（神歌＝雑芸と総称される謡い物の一種）、『日本書記』、『大鏡』、西行法師『選集抄』、正倉院文書（戸籍残簡＝郷戸）、大宝律令・養老律令、『今昔物語』（童話的な説話）、藤原明衡『本朝文粹』、紀貫之『土佐日記』、『古事記』

第四編 中世…『曾我物語』、『太平記』、『家訓』（北条重時『平重時家訓』、斯波義将『竹馬抄』など）、西行法師『山家集』、鎌倉幕府法令、無住『沙石集』、謡曲（桜川、角田川、三井寺、自然居士、百萬、土賊、花月、鳥追舟、土車、など）、狂言（以呂波、名取川、など）、『北条九代記』、教科書『千字文』、『和漢朗詠集』、『実語教』、『庭訓往来』、『消息往来』、『童子教』、『今川状』、『源氏物語』、『小倉百人一首』、『貞永式目』など）、世阿弥『花伝書』、童話（『宇治拾遺物語』など）、御伽草子、童

謡・民謡

第五編 近世…川柳（『柳多留』など）、西鶴『武家義理物語』、グロヴニン『日本幽因記』、『近世畸人伝』、佐藤信淵『垂統秘録』、日記、一茶『おらが春』、若者条約（若者組の規約）、浄瑠璃（『伽羅先代萩』、『菅原伝授手習鑑』、『傾城阿波の鳴門』など）、良寛（和歌）、子守歌・童謡・遊戯歌・「いろはかるた」・遊び道具（双六など）、（児童芸術としての）人形つかい・覗きからくり、読物（赤本、黒本、黄表紙本、など）、西川求林斎『町人囊』、『東照宮御遺訓 附録』、福沢論吉『福翁自伝』

第六編 近代…横山源之助『日本の下層社会』、河上肇『社会問題管見』、近松『女殺油地獄』、浮世絵

（付：一般的な参考文献は除いている）

やや繁雑にわたったが、これを見ると桜井博士がいわゆる「歴史的文献・資料」以外に、広く各時代の児童の生活を把握するために多様な資料を用いていることが理解されるが、これには当時の柳田国男を中心とする民族学の示唆もあったと考えられる。桜井博士は柳田国男の『民間伝承論』が刊行されると間もなく、『社会学徒』誌上で書評の対象として取りあげて、高く評価しており<sup>20)</sup>、民族学への関心を持ち、一定の評価を与えていたと考えられる。なお、どのような資料を用いていたかを明らかにすることによって、どのような視点で、どのような点に中心をおいて児童の生活を把握しようとしていたかについても推測することができる。

#### (5) 児童観と児童への期待

桜井博士の児童生活史研究の基底に一貫して存在していた認識、心情は児童に対する期待、希望であった。直接的には日本の児童文化の貧困な状況、さらに間接的には日本の児童が歴史

的におかれてきた困難な状況への憤りが桜井博士の児童生活史研究の動機となったことは先に指摘したが、それは同時に児童を尊重し、児童に対して期待し、希望を寄せる心情に裏づけられたものであった。

桜井博士は『新版』の「結論」において「…(略) …書き終って感じられることは、日本の児童の生活は、すくなくともその大多数であった庶民階級の児童について考える限り、まことに苦しみと悩みに充ちたものであった、ということである。」と、日本の児童の生活が苦しみと悩みに充ちたものであったこと、さらに社会の状況やそこでの生活上の困難が直接児童やその生活に反映してきたことを指摘した上で、そうした状況の下においても、「しかし日本の児童は、いつもジメジメとしよげて泣いてくらししていたのではなかった。苦悩の生活の間にひらめくその雄々しさ、その正しさと叡智、われわれはそれを見落としてはならない。」「日本の児童は、いつの時代でも、いかなる場合でも、常に明るく正しかったし、また元氣だった。あかるい児童の生活に暗い影がさしたこともないではなかったが、それは児童の罪ではなく、むしろ誤った児童観をもったその時代のおとなのためであった。」<sup>22)</sup> と、日本の児童について高く評価するとともに、「誤った児童観」など、児童に対する大人、大人社会のあり方が問題の原因となっていたとの指摘を行っている。なお、これと同じ視点から「誤った戦争は、罪のない子供たちに、この上もなく大きな犠牲を強い、限らない苦しみと悲しみを興えた。戦争前、ようやく発達しかけた児童文化も、戦争のために全く中絶し後退してしまった。」<sup>23)</sup> と、「戦争が子どもに対して、いかに犠牲を強いるものであるか」という考えを明らかにしている。

なお最後に、1948年という『新版』が刊行された時代状況と深く関連する発言であるが、桜

井博士は次のように日本の児童に対する希望・期待を表明することによって、この著作の記述を閉じていることを紹介しておきたい。

「かように今日はまことに苦難に充ちた時代である。しかし日本の児童は、これに耐え、これにうち克って力強く生い立ち、やがて輝かしい眞の民主主義日本をきずくであろう。今まで児童は、常に社会から、おとなの世界から忘れられて来た。また児童文化は正常な地位を与えられなかった。しかしながら今後、あたたかい愛情をもって積極的に児童の生活を見まもり、児童がすくすくと生いたってゆけるような環境をつくってやることは、まさにわれわれの責務である。われわれはそのために、児童が正しい、豊かな、そして健康な文化をもち得るように熱意のある指導と協力をとおしではならぬ。わたしは日本の児童の輝かしい未来を、またかれら児童たちによってになられる将来の日本を、期待し祝福して、ここに『日本児童生活史』のペンをおきたいと思う。」<sup>24)</sup>

### 3. 桜井庄太郎博士の「日本児童生活史」研究の位置づけ

#### (1) 研究の位置づけ

桜井博士の日本児童生活史研究が、日本の児童史研究の歴史の上でどのような位置づけを持つかを初めに明らかにしたい。桜井博士自身は「児童の問題はきわめて重要であるのに、今まで充分な顧慮を拂われていなかった。児童文化の問題がまじめにとりあげられ始めたのは、最近のことに属する。」<sup>25)</sup> と『旧版』が刊行された時期(1941年)までの児童生活史の研究状況について明らかにした上で、この研究と同様な領域に属する先行研究として、野口樹々(伊東三郎、野口昌夫の共同著作であり、野口樹々は共同ペンネーム)『児童問題』(特に、第二章「兒

童の歴史』)と増田抱村『児童社会史』を取り上げ、野口氏のは簡単であり、増田氏のは江戸時代しか取扱っておらず、桜井博士自身は自分の著書について「したがって、わたしのこの書は、まづしいものながら比較的にとまとまった日本の児童生活史として、はじめてのものではないかと思う。」と、『旧版』刊行時(1941年)における自らの著書の位置づけを示している<sup>26)</sup>。また『新版』の「序」においてもほぼこの記述をそのまま記載した上で、「そしてこの種の著書は、その後も公けにされたものがないようである。したがってこの書も、まづしい小著ではあるが、多少の存在理由をもち得るかと思われる。」<sup>27)</sup>と、『旧版』刊行後『新版』刊行までの7年間にこの領域においてはまとまった研究成果の刊行がなく、それ故、この著書がなお一定の意義を持つと自ら位置づけている。

このような位置づけは桜井博士の独断、あるいは当時の研究状況を十分認識しない故の発言ではなく、今日においても広く認められるところであるといつてよい。久木幸男は日本の児童の歴史について初めて刊行された全集『日本子どもの歴史』の序論において、先行研究を検討する中で、「昭和二三年・二四年(一九四八、四九)にそれぞれ公刊された桜井庄太郎『日本児童生活史(新版)』と石川謙『我が国における児童観の発達』は、この暗黒にさしそめた一条の曙光にもなぞらえることができるであろうか。前者は原始・古代から敗戦直後までの子どもの姿をひとわり描き出そう努めており、子ども史としては最初の、そして本『日本子どもの歴史』シリーズ以前における唯一の通史である。子どもの生活を時代と社会の諸条件との関連のなかでとらえようとしているだけでなく、民衆の子どもにも目を注ぐ努力のあとも見受けられる。」<sup>28)</sup>とし、桜井博士の日本児童生活史研究が先駆的なものであり、同時に数少ない通

史の一つであると位置づけている。また、日本児童史研究の歴史について検討した数少ない論文「日本児童史の歴史と展望」の中で、上笙一郎は野口樹々の『児童問題』と桜井博士の『日本児童生活史』が「…(略)…昭和期が初年代を送って十年代に入るや、突如といったおもむきで二点の児童史通史的な書物の出現を見たのだった。」とした上で、「そして次ぎに桜井庄太郎の『日本児童生活史』はというと、これは雑誌『愛児』の連載原稿を一冊にまとめたもので、野口樹々こと伊東三郎が地球規模でトータルに略説した児童生活・児童待遇の歩みを、〈日本〉という一国に収斂させ史料的に具体化したものと言ったらよいだろうか。」とその内容を把握し、「…(略)…時代ごとの児童問題の把握がかならずしも深いとは言えず、用いられた史料も豊富とは決して言えない。が、にもかかわらず、立論の根をフランス系の社会史学を支えられたこの一冊は、彼の父性的心情の真実性とそれなりの理論的一貫性とをそなえていて、『比較的にとまとまった日本の児童生活史として、はじめてのもの』であり、その栄誉の破られることはおそらく永久にないだろうと思われるのだ。」<sup>29)</sup>と位置づけている。これらの指摘に見られるように、この著作は刊行時における児童史研究、さらには歴史研究全体の進展状況や、時代的・社会的制約に起因する限界は存在するが、今日の時点においても日本における児童生活史研究、通史的著作の先駆として位置づけることができる。

次に、児童生活史研究は桜井博士において、その専門である社会学、特に教育社会学とどのように関連するものと位置づけられていたのだろうか。この点について時期は前後するが、桜井博士自身は「…(略)…教育史を科学的に、社会学的に研究しようとするれば青少年史研究にもとずかなければならないこと、また現代の教



育現象の研究にも青少年史的理解が重要であることを述べた。青少年史の研究はこのような意味において、教育社会学とかかわりをもつであろう。それ故、私は、青少年史は教育社会学の前提的もしくは背景的問題として重要であると考える。教育現象の歴史性を重んずる限りにおいては、青少年史の研究は教育社会学の研究を一そう完全なものとするのに役だつであろう。」<sup>30)</sup>と、その考えを示している。このように、桜井博士は教育現象が歴史性を持つものであるところから、青少年史・児童生活史の研究が社会現象、歴史的存在としての教育現象を理解する上での前提となり、その素材を提供することになると位置づけていたと理解される。

## (2)今日の評価

終りに、桜井博士の児童生活史研究の今日の評価と、そこから現代の私たちが学ぶべき点について考えたい。

桜井博士の『日本児童生活史』は研究史上、先駆的な研究と位置づけられるが、同時にその研究の視点と研究内容については、今日の時点においてもなお積極的に評価することができる。

研究の視点については、今日、社会史、教育史の分野においてその比重を増してきているアナール派の視点に共通するものが存在すると考えられる。アナール派は「歴史学を広義の社会科学の一環として位置づけ、諸学問分野の交流のうえに立って歴史の相対的な把握をめざした。」<sup>31)</sup>ものであり、「この派はデュルケム学派社会学の影響を受け、事件史中心の伝統的史学を批判し、社会をその『全体性』において考察せんとし、経済決定論に対して民衆の集散的『心性』の長期的変化を焦点とする『生きた歴史学』を提示する。」<sup>32)</sup>点に特徴がある。アナール派が、その拠り所となる『経済・社会史年報』(*Annales d'histoire économique et sociale*)を創刊し

たのは1929年であり、桜井博士がこの年報を読んでいたかは確認できないが、フランス社会学、特にデュルケムに関心を持っていたところから、何らかの接点があったと推測することは不可能ではない。この点について、中内敏夫は「なお、アナール派の歴史学＝社会史と日本の教育および教育史研究の関係についていえば、戦前一九三〇年代に、日本大学社会学研究室の『社会学徒』グループによる接触がすでにあり、そこから社会福祉事業史に関する一連の業績をのこした浅野研真（もと新興教育研究所々員）、『日本児童生活史』（一九四八年）、『日本青年史』（一九五二年）など、素朴とはいえ、この分野での端緒となる業績を残した桜井庄太郎がでていることを付記しておこう。」<sup>33)</sup>と、アナール派との関連が存在したと指摘している。そして、「浅野の同志として、同じくこの『社会学徒』に拠った人物に、桜井庄太郎がいる。『社会学徒』誌に武士、農民、僧侶、奴婢、町人などの『社会史的考察』を発表していた桜井が他方でまとめた『日本児童生活史』（四一年）、『日本青年史』（五二年）は、日本における社会史としての教育史の誕生にささげられた礎石となった。」<sup>34)</sup>と、今日のアナール派の視点を取り入れた社会史的教育史の立場からも、桜井博士の『日本児童生活史』を、その先駆的な研究として高く評価できると指摘している。

この指摘に代表される先行する研究者の桜井博士の『日本児童生活史』についての位置づけ、評価を参照して、ここでは、次のように位置づけ、評価しておきたい。

1. 日本の児童の実態に即した総合的な通史としては、日本における先駆的な研究成果と位置づけられる
2. 児童文化や児童問題、児童社会問題に限定せず、児童の生活を総合的に把握しようとする立場に立った研究である

3. 児童とその生活を把握していく上で、児童のおかれている社会的状況を重視し、それとの関係を常に考慮して考察していこうとする視点があった
4. 先行研究や文献・資料に全面的に依存することなく、その欠如を補う意味からも多様な素材を利用し、総合的な認識を目指した
5. 児童生活史を把握する立場、視点、方法から見て、今日広く受け入れられているアナール派に代表される社会史的教育史に共通するものを持っていた

今日、児童や教育についての歴史的な研究、特に、その社会史的研究、心性史的研究が必要であることが認識され、大きな成果をあげてきているが、きわめて素朴なものであったとしても、その萌芽がここにあったと考えられるのであって、その点において、桜井博士の日本児童生活史研究は今日においても高く評価することができると思う。

さらに、桜井博士の日本児童生活史研究は現代の教育学の研究にとって新しい視点を提供することができる可能性を持っていると考えられる。それは、大田堯が『教育研究の課題と方法』の中で「…（略）…民衆の自衛組織としての古い集団の中で持続してきた人間を人間にするための重い習俗の中に、現代の教育学が、改めて眼をむけていくことが、一つの大切な未来への

アプローチではないかと考えるようになっている。」<sup>35)</sup>として、「現代の教育と教育学はこのような何重かの意味での人類の危機、とりわけ子育ての困難そのものに見られる種の持続危機の前に立たされている。」<sup>36)</sup>という現代の教育学が直面する課題に対して、「すなわち人間という動物種が、他の生きものとの共存関係の中で、その種の特性を持続させ、かつ発展させることに教育本来の機能が根ざしているはずだということ、そのために長い時間にわたって努力してきたごく普通の人びとの努力の一端が、教育の習俗として重く私たちに伝えられていることを、教育研究にあたる者は自覚する必要がある…（略）…」<sup>37)</sup>という提言をしているが、既に早くも桜井博士の日本児童生活史研究はこのような提言に答え、ここにいう「教育の習俗」についての具体的な内容を教えてくれていると考えられる。

このように、桜井博士の日本児童生活史研究は、児童をめぐる多様な問題に直面し、その実態を把握し、何らかの対応策を求められている私たちにとって、学ぶべき点を多く持っていると同時に、現代の教育と教育学の課題の解決に寄与することができる多くの示唆を内包しているという意味において学ぶべき点があるのではないだろうか。

[1996年11月 稿]

[注]

- 1) 加藤理『「ちご」と「わらは」の生活史』1994年、i 頁、iii～iv 頁
- 2) 『日本児童生活史』の構成を、『新版』、『旧版』で対象することができるように示すと、次の通りである。

『旧版』 = 『日本児童生活史』1941 (昭和16)年 6 月 25日、刀江書院 刊	『新版』 = 『日本児童生活史 (新版)』1948 (昭和23) 年 6 月20日、日光書院 刊
序	序…………… 1
緒論…………… 1	緒論…………… 9
第一編 上古…………… 6	第一編 原始時代……………13
第二編 中古……………11	第二編 古代……………11
第一節 家族制度と親子の關係…………… 11	第三編 上代……………25
第二節 教育と職業…………… 16	第一節 庶民の子とその生活…………… 28
第三節 児童保護…………… 17	第二節 児童保護…………… 36
第四節 童謡と子守唄…………… 20	第三節 家族制度と親子關係…………… 38
第五節 童話…………… 24	第四節 教育と職業…………… 44
第六節 遊戲…………… 30	第五節 児童觀…………… 45
第七節 中古の社會と庶民の子…………… 33	第六節 童謡と子守唄…………… 49
第八節 児童觀…………… 41	第七節 童話と遊戲…………… 53
第三編 中世……………48	第四編 中世……………61
第一節 家族制度と親子關係…………… 48	第一節 家族と親子…………… 63
第二節 武士の子とその生活…………… 52	第二節 武士の子とその生活…………… 68
第三節 武士の家訓に現われた親と子…………… 59	第三節 武士の家訓にあらわれた親と子…………… 73
第四節 庶民の子とその生活…………… 61	第四節 庶民の子とその生活…………… 75
第五節 教育…………… 69	第五節 寺院の教育的活動とキリシタンの學校…………… 83
第六節 職業…………… 74	第六節 職業の世襲と一子相傳…………… 88
第七節 童話…………… 77	第七節 童話の階級性…………… 91
第八節 童謡…………… 83	第八節 童謡と遊戲…………… 97
第九節 遊戲…………… 86	
第四 近世……………90	第五編 近世……………103
第一節 自然の親子と人為の親子…………… 90	第一節 自然の親子と人為の親子…………… 105
第二節 出産と育児…………… 95	第二節 出産と育児…………… 111
第三節 子供仲間と若衆組…………… 117	第三節 子供仲間と若者組…………… 135
第四節 侍の子…………… 121	第四節 侍の子…………… 145
第五節 子の道徳…………… 129	第五節 文學にあらわれた庶民の子…………… 153
第六節 職業…………… 133	第六節 職業と教育…………… 161
第七節 教育…………… 136	第七節 童謡、遊戲、児童讀物…………… 168
第八節 童謡と遊戲…………… 141	
第九節 文學に現われた児童…………… 149	
第五編 最近世……………153	第六編 近代……………176
第一節 明治維新と児童の生活…………… 154	第一節 明治維新と児童の生活の變化…………… 178

第二節 親子関係の變化	155	第二節 近代産業と児童労働	180
第三節 教育の改革	157	第三節 農村の児童	187
第四節 近代産業と児童労働	160	第四節 親子関係の變化と人口問題	190
第五節 児童保護事業の發展	163	第五節 教育の改革とその方向	193
第六節 児童文化の諸問題	166	第六節 児童保護事業の發展	196
		第七節 児童文化の諸問題	198
		結論	205
日本児童生活史年表	177	日本児童生活史 年表	211
主要参考書	213	日本児童生活史 主要参考文献	251
索引		索引	263

なお、『新版』は1982年に日本図書センターから「教育名著叢書」10として、田嶋一の解説を付して復刻、刊行されている。

また、ここで参考として、桜井庄太郎『日本青年史』1952年10月15日、大蔵省印刷局刊（編集者 全日本社会教育連合会）の構成を示しておく。

はしがき	11
一章 原始社会の青年	15
二章 古代の青年	22
三章 上代の青年	29
一、青年貴族群と庶民階級の若者たち	33
二、健兒と防人	37
三、家族制度と恋愛、結婚	40
四、武士の勃興と家の子、郎等	47
四章 中世の青年	50
一、青年武士の生活	53
二、政略結婚の流行	60
三、農村の青年たち	64
四、商工業の發展と徒弟制度	68
五章 近世の青年	71
一、武士階級の青年	72
二、農村青年と百姓一揆	76
三、若連中と若衆宿	80
四、都市の發達と商工青年	86
五、はたらく娘たち	93
六、封建家族と恋愛の悲劇	99

七、寺子屋の教育	104
八、青年の社会的地位	106
六章 近代の青年	108
一、自由民権と青年	110
二、青年会と処女会	116
三、教育の国家主義化	122
四、資本主義の發展と青年労働者	130
五、徴兵制度と戦争	136
六、女性の解放と近代恋愛	140
七章 現代の青年	148
一、教育の転換	150
二、青年団の活動	155
三、青年と労働	160
四、戦争の犠牲	164
五、女子青年をめぐる諸問題	168
六、青年の社会的地位と社会の青年観	175
日本青年史 参考書	181

3) 桜井庄太郎博士の略歴は次の通りである。

1900（明治33）年4月18日	東京市深川区にて 出生
1913（大正2）年3月	東京市日本橋区浜 町小学校卒業
1918（大正7）年3月	日本大学中学校卒 業
1923（大正12）年3月	日本大学法文学部 予科修了

1926 (大正15) 年 3 月	日本大学法文学部 社会学科卒業	1963 (昭和38) 年 4 月	日本大学文学部教 授
1926 (大正15) 年 4 月	日本大学大学院 (社会学専攻、昭 和 3 年 3 月退学)	1967 (昭和42) 年 4 月	明星大学人文学部 教授
1927 (昭和 2) 年 4 月～ 1940 (昭和15) 年 3 月	月刊社会学研究誌 『社会学徒』編集・ 発行の責任者となる	1970 (昭和45) 年 8 月	在職のまま逝去 この間、日本大学、 奈良女子大学、名 古屋大学、神戸大 学、大阪市立大学、 大阪大学、京都大 学、同志社大学、 などで非常勤講師 を勤める
1928 (昭和 3) 年 3 月	日本大学主事(図 書館勤務)	4) 桜井庄太郎博士の主要著書としては、次の著書 があげられる。 『日本封建社会史—初期封建社会に関する若干 の研究』 1931 (昭和 6) 年 白鳳社 『日本封建社会意識論』 1938 (昭和13) 年 刀江書院 『日本児童生活史』 1941 (昭和16) 年 刀江書院 『大日本青年団史』(付記…熊谷辰治郎編著と奥 付に示されているが、実際の編述は桜井庄太郎が 担当したと「序」に記されている。) 1942 (昭和17) 年 日本青年館 『日本児童生活史 (新版)』 1948 (昭和23) 年 日光書院 『日本封建社会意識論』(新版) 1949 (昭和24) 年 日光書院 『教育社会学』1～4 分冊 1950 (昭和25)～51 (昭和26) 年 日本大学通信教育部 『教育社会学通論』(共著) 1952 (昭和27) 年 岩崎書店 『社会学』(上・下)(樺俊雄・佐藤智雄と共著) 1952 (昭和27) 年 学術文化図書刊行会 『日本青年史』	
1938 (昭和13) 年 9 月	日本大学予科講師		
1941 (昭和16) 年 3 月	日本大学を辞任		
1941 (昭和16) 年 3 月	大日本青少年団囑 託(『大日本青年 団史』編纂に従事)		
1942 (昭和17) 年 3 月	大日本青少年団主 事		
1945 (昭和20) 年 7 月	大日本青少年団解 消のため退職		
1948 (昭和23) 年12月	日本大学専任講師		
1949 (昭和24) 年 4 月	中央労働学園大学 社会学部教授		
1951 (昭和26) 年 1 月～ 3 月	文部省教育指導者 講習会 (IFEL) 教育社会学班に参 加・修了		
1951 (昭和26) 年 4 月	中央大学文学部教 授		
1955 (昭和30) 年 4 月	奈良女子大学文学 部教授		
1959 (昭和34) 年12月	『社会意識の研究— 日本封建社会にお ける社会関係意識 を中心として』に より文学博士 (日 本大学)		

- 1952 (昭和27) 年 大蔵省印刷局  
『恩と義理－社会学的研究』
- 1961 (昭和36) 年 アサヒ社  
『社会学』
- 1964 (昭和39) 年 アサヒ社  
『食物文化史』
- 1968 (昭和43) 年 全国通信教育協会  
『教育社会学 (上)』
- 1969 (昭和44) 年 明星大学  
『教育社会学指導書 (上)』
- 1969 (昭和44) 年 明星大学  
『名誉と恥辱－日本の封建社会意識』
- 1971 (昭和46) 年 法政大学出版局  
『日本児童生活史 (新版)』 (復刻版)
- 1982 (昭和57) 年 日本図書センター  
なお、注2)、3)については『飛火野－桜井庄太郎先生追悼文集』1971年、奈良女子大学社会学会刊、掲載の略歴・著書目録を基礎として著者が補訂、要約した。
- 5) 福武 直 「日本社会学」(内藤莞爾・阿閉吉男編『社会学史概説』1957年、所収) 440頁
- 6) 桜井庄太郎 「たどって来た道」(奈良女子大学社会学会『奈良女子大学社会学論集』第5・6・7号 (桜井教授退官記念特集号)、1963年、所収) 1～4頁
- 7) 桜井庄太郎 『日本児童生活史』1941年、序3頁
- 8) 桜井庄太郎 『日本児童生活史 (新版)』1948年、198～204頁
- 9) 桜井庄太郎 「青少年史の研究と教育社会学」(日本教育社会学会編『教育社会学研究』第2集、1952年、所収) 93頁
- 10) 桜井庄太郎 『恩と義理－社会学的研究』1961年、14頁
- 11) 桜井庄太郎 『日本封建社会意識論 (新版)』1949年、2頁
- 12) 桜井庄太郎 前掲 (1948年) 154頁
- 13) 桜井庄太郎 前掲 (1941年) 2頁
- 14) 桜井庄太郎 前掲 (1941年) 3～4頁
- 15) 桜井庄太郎 前掲 (1948年) 12頁
- 16) 桜井庄太郎 前掲 (1941年) 2～3頁
- 17) 桜井庄太郎 前掲 (1941年) 4～5頁
- 18) 桜井庄太郎 前掲 (1941年) 3頁
- 19) 『新版』では初めに「原始時代」が加えられ、『旧版』の「上古」が「古代」に、「中古」が「上代」に、「最近世」が「近代」に改訂されている。これは歴史研究の進展に影響されたものであろうが、それ以上に『旧版』出版当時 (1941年) の日本史研究に対する制約に起因すると考えられる。一例をあげるならば、近代としての明治時代の特徴の説明は両版の間で大きく異なっており、明治維新などに対する認識を率直に示すことができるか否かの条件が大きく変化したことが推測される内容になっている。
- 20) 桜井庄太郎 前掲 (1948年) 177頁
- 21) 桜井博士は、柳田国男の『民間伝承論』について「民間傳承學の方法論を説けるものとして、此の書はデュルカーム派社会学に於けるデュルカームの『社会学研究法基準』にも比すべきものたること」と高く評価している。桜井庄太郎「柳田国男の『民間伝承論』」(書評) (『社会学徒』第8巻第10号、1934年、所収)
- 22) 桜井庄太郎 前掲 (1948年) 205～206頁
- 23) 桜井庄太郎 前掲 (1948年) 206頁
- 24) 桜井庄太郎 前掲 (1948年) 208～209頁
- 25) 桜井庄太郎 前掲 (1941年) 1頁
- 26) 桜井庄太郎 前掲 (1941年) 序1～2頁
- 27) 桜井庄太郎 前掲 (1948年) 2頁
- 28) 久木幸男「夜明けの子どもと子どもの夜明け (子ども史研究の夜明け)」(『日本子どもの歴史』1. 久木幸男編『夜明けの子ども』1977年、所収) 14～15頁
- 29) 上笙一郎 『日本児童史の開拓』1989年、56～57頁

- 30) 桜井庄太郎 前掲(1957年) 97～98頁 桜井庄太郎 『日本封建社会意識論(新版)』1949年、日光書院
- 31) 二宮宏之「アナル学派」(森岡清美・塩原勉・本間康平編『新社会学辞典』1993年、所収) 16頁 桜井庄太郎 「青少年史の研究と教育社会学」(日本教育社会学会編『教育社会学研究』第2集、1952年、東洋館出版社) 所収
- 32) 大野道邦「社会史」(日本教育社会学会編『新教育社会学辞典』1986年、所収) 394頁 桜井庄太郎 『恩と義理—社会学的研究』1961年、アサヒ社
- 33) 中内敏夫 『新しい教育史—制度史から社会史への試み』1987年、94頁 桜井庄太郎 「たどって来た道」(奈良女子大学社会学学会『奈良女子大学社会学論集』第5・6・7号(桜井教授退官記念特集号)、1963年、所収)
- 34) 中内敏夫 前掲(1987年) 224頁 桜井庄太郎 『日本児童生活史(新版)』(復刻版) 1982年、日本図書センター
- 35) 大田 堯 『教育研究の課題と方法』1987年、257頁 桜井庄太郎 『桜井庄太郎児童史論集』(高島秀樹編、日本児童文化史叢書9) 1996年、久山社
- 36) 大田 堯 前掲(1987年) 271頁
- 37) 大田 堯 前掲(1987年) 299頁
- [参考文献]
- 大田 堯 『教育研究の課題と方法』1987年、岩波書店
- 大田 堯 『子育て・社会・文化』(人間の歴史を考える④) 1993年、岩波書店
- 大野道邦 「社会史」(日本教育社会学会編『新教育社会学辞典』1986年、東洋館出版社) 所収
- 加藤 理 『「ちご」と「わらは」の生活史』1994年、慶應通信
- 上笙一郎 『日本児童史の開拓』1989年、小峰書店
- 久木幸男 「序章 夜明けの子どもと子どもの夜明け(子ども史研究の夜明け)」(『日本子どもの歴史』1、久木幸男編『夜明けの子ども』1977年、第一法規) 所収
- 桜井庄太郎 「柳田国男の『民間伝承論』」(書評) (『社会学徒』第8巻第10号、1934年) 所収
- 桜井庄太郎 「日本児童生活史」(一)～(七) (『愛児』第8巻第2号～第8号、1939年) 所収
- 桜井庄太郎 『日本児童生活史』1941年、刀江書院
- 桜井庄太郎 『日本児童生活史(新版)』1948年、日光書店
- 中内敏夫 『新しい教育史—制度史から社会史への試み』1987年、新評論
- 二宮宏之 「アナル学派」(森岡清美・塩原勉・本間康平編『新社会学辞典』1993年、有斐閣) 所収
- 野本三吉 『近代日本児童生活史 序説』1995年、社会評論社
- 福武 直 「第8章 日本社会学」(内藤莞爾・阿閉吉男編『社会学史概説』1957年、勁草書房) 所収
- [付記]
- 本稿は「第2回日本子ども社会学会大会」(1995年6月11日、明治学院大学)における口頭発表の内容を基礎として、当日の発表に寄せられた出席者からの意見や質問を取り入れて、追加・訂正したものである。また、その発表を契機として、上笙一郎氏・日本児童文化史研究会のご尽力により、桜井庄太郎博士の児童史関連論文を集成して『桜井庄太郎児童史論集』を「日本児童文化史叢書」の1冊として、1996年4月に久山社から刊行することができたが、

本稿の一部にはその「編者解説」と重複する部分が含まれていることを付記する。なお、著者は本稿の続稿として桜井庄太郎博士の青年史研究、教育社会学について順次明らかにしていきたいと計画している。

本稿の発表を機に、あらためて学部時代に教育社

会学についてご指導いただいた桜井庄太郎先生、日本子ども社会学会でのご意見・ご質問を通して貴重な示唆をいただいた上笹一郎氏をはじめとする先生方に、心からの感謝の意をあらわします。

(たかしま ひでき、本学科教授)